

登山 月報

JMSCA

登山月報 第677号 令和7年8月15日発行



「大峰山系(世界遺産 大峯奥駈道)」写真提供/奈良県山岳連盟 顧問 川畑忠仁

8月11日 みんなで山を考えよう!
祝「山の日」
全国「山の日」協議会
山に親しむ機会を得て 山の恩恵に感謝する

No.677

JMSCA クラウドファンディング報告	2
2025 年 ボルダーワールドカップ シーズン総括報告	3
2025 年度全国遭難対策委員長会議 報告	4
2025 年度全国遭難対策協議会 報告	4
茨城県山岳連盟自然保護委員会のSDG s な活動	5
JMSCA 自然保護委員会フィールド研修会2025	6
寄贈図書	6
第21 回 山岳遭難事故調査報告書 その5	7
Enjoy Climbing	10
JMSCA、表紙のことば	11

JMSCA クラウドファンディング 報告



2025年4月1日、JMSCAとして初の試みとなるクラウドファンディングのプロジェクトがスタートしました。2025年6月30日に終了し、結果は以下の通り、JMSCAに関わる皆さんのご協力によって大成功に終わりました。

◆ 応 援 額	1,021,500円
◆ 達 成 率	255%
◆ 応 援 者	41人
◆ ページ訪問者数	6,461人

集まったお金は、リターン品、必要経費などを差し引いて残った利益を、今回中心となった岩手県山岳・スポーツライミング協会（以下、JMSCA）とJMSCAで按分し、今後の自然保護活動や登山道整備などの活動に役立てていきます。

今回の企画の背景は、JMSCAの基盤である山岳会会員、共済会会員が減少傾向の中、中央としても各現場に頼るだけでなく、安定した基盤づくりのためにできることはないかという課題感から出発しました。既存会員は高齢化の一途を辿っています。今後の会員の減少は加速することが明らかです。そこで、これまで接触できなかった方々に少しでもJMSCAやその活動について認知してもらうことの必要性から、今回の取り組みに至りました。

肝心のクラウドファンディングの中身ですが、大きくはまず登山ツアーの提供です。文学登山ツアーと銘打って、これから登山を始めたい初心者や、登山初心者をターゲットにしました。他、山に関連するグッズを用意し、経験者含めて広く応援しやすい形で実施しました。これらをリターンとして応援を募りました。

リターンの企画は試行錯誤でしたが、今回の内容に決まったきっかけは、JMSCAが発売した書籍「岩手山花と木」でした。登山を、登頂を目指すだけのものでなく、その途中にあるものにも注目して豊かに楽しもうという呼びかけを兼ねることで、登山以外の興味のある方々を含め、より広く声が届くのではと考えてのことでした。最終的に、山の植生に加え、文学をかけ合わせたツアーと

して企画しました。

クラウドファンディングという手法を選んだ理由は、クラウドファンディングには、事業のストーリーが伝わりやすい特徴がある点が1つ。そしてプラットフォーム自体にユーザーが付いていることで、普段山のことを考えたことがなかったような方々の目にも入るという2つの点からでした。これによって、これまでの山岳関連の講習会のように、JMSCAのHPで掲示するだけではなく、広く一般に告知することが可能となり、山岳会の会員以外のライトな登山ユーザー層にまで情報が届く可能性が広がります。また、ストーリーを語る効果として、共感を得やすく、事業の内容について深い理解を得ることができます。今回舞台となる岩手では、岩手山の火山活動の活発化による入山禁止の状況が生まれていますが、こういった状況自体もストーリーとして、応援してもらうための活力に変えることができました。

プロジェクトの目的には認知獲得の他、JMSCAの新規事業の可能性の模索という側面もありました。JMSCAが主体的に動いて収益を上げられる手段の構築です。今回の登山ツアーのよいところは、購入してもらう商品の在庫リスクのない、いわゆる受注生産型の事業になります。協会として、財務リスクのない形で事業進行ができることは大きいと考えています。加えて、実際には協力いただく地域の山岳会があり、そしてそれだけでなく、地域の観光組織とも密に連携・協力することとなります。全国に組織のあるJMSCAの利点を活かす、地域の活性化にもつながります。今回はテストケースとして、JMSCAの協力のもと進行しましたが、これをきっかけに、改めて岩手県の魅力を探る機会になり、新鮮な発見が多々ありました。このように、山にまつわる魅力を再発見することは、その地域の魅力を増すことにもつながります。そしてこの魅力をてこに、登山ツアーの販売も伸ばしていければ、JMSCAにとっても地域にとっても持続可能性のある事業になりうるのではと考えています。

今後の目指すところは、47都道府県の各地域で同様の事業を展開することです。登山ツアーと、地域の山にまつわる商品を各地域ごとに展開していければと思います。この実行にあたっては、現在準備されているJMSCAフレンドの活用も考えています。JMSCAフレンドでイベントとして登山ツアーを販売し、会員登録も同時に獲得していくことで、JMSCAとしてコンタクトの取れる基盤を大きくすることもできます。

登山ツアーとしては、今回のような文学もあれば、例えば被災した山を舞台にした復興登山ツアーなどの社会貢献的な企画も想定しています。色々なアイデアを組み合わせ、新しいJMSCAの役割を打ち立てられたらと思います。

2025年 ボルダーワールドカップ シーズン総括報告

文責：日本代表ヘッドコーチ 安井博志

2025年のボルダーワールドカップ（以下、W杯）は全6戦で開催され、例年とは異なる複数の変更点があるシーズンとなりました。主な変更としては、出場人数が制限され、日本からの出場は最大6名に限られたこと、また新たにポイント制が導入されたことが挙げられます。これにより、ゾーン取得の重要性が増し、完登数だけでは順位が決まらない場面も多く、戦略的な読みが難しい大会となりました。

日本代表チームでは、前半戦と後半戦で一部選手の入替えを行いました。これにより、選手間の競争意識が高まり、全体のモチベーション維持にも繋がったと考えています。結果として、男子では安楽宙斗選手が3年連続の年間王者に輝き、天笠颯太選手が3位を獲得しました。女子では中村真緒選手がW杯初優勝を果たし、年間ランキング2位となるなど、多くの選手が表彰台に立つ活躍を見せました。

個別に見ると、関川愛音選手が初の表彰台に上がるなど、著しい成長を示しました。また、安楽選手はシーズンを通して安定した成績を残し、特にヨーロッパラウンドでの新しい課題傾向にも柔軟に対応する姿が印象的でした。これまでにない動きに即応できる力が備わっており、今後のさらなる飛躍が期待されます。

課題傾向としては、従来の「飛ぶ動き」中心から、保持力や指の力が求められるクライミング的要素が増加している傾向にあります。1本指を使うシーンも男子を中心に見られるようになり、怪我への配慮をしながらも、新しい時代に必要な要素として受け止めています。若手選手にはこの変化が新たな挑戦となるでしょう。

遠征体制については、今シーズンから現地入りを従来より1日早める運用に変更しました。これにより、時差や移動疲労への対応、会場下見、現地トレーニングなどの調整がしやすくなり、選手とケアスタッフ間でのコンディション共有にも効果がありました。また、現

IFSC クライミングワールドカップ 個人年間ランキング一覧（日本人選手のみ）

種目	ボルダー			
	男子		女子	
種別	順位	氏名	順位	氏名
No.				
1	1位	安楽 宙人	2位	中村 真緒
2	3位	天笠 颯太	4位	関川 愛音
3	6位	檜崎 智亜	5位	松藤 藍夢
4	9位	檜崎 明智	7位	野中 生萌
5	14位	藤脇 祐二	17位	伊藤ふたば
6	19位	杉本 怜	27位	葛生 真白
7	33位	杉本 侑翼	44位	村越 佳歩
8	38位	山口 賢人	49位	森 秋彩
9	42位	佐野 大輝	65位	山 真奈実
10			71位	末澤 結衣

■ は年間表彰対象者

地でのトレーニング中にファンとの交流が生まれたことも、選手たちのモチベーション向上に繋がりました。

今シーズンは、チームのInstagramアカウントも再始動し、選手・スタッフともに積極的に発信を行いました。これにより、選手一人ひとりの個性がより伝わるようになり、国内外のファンとの繋がりが深まっています。

シーズンを通して、選手には「変化に適応すること」の重要性を伝えてきました。課題傾向やルールが大きく変わる中で、柔軟な対応力が求められる場面が増えており、思考を固めすぎず、周囲を見て判断する冷静さが重要です。そうした考え方が選手・スタッフの間に浸透してきた実感があります。

後半戦への代表争いでは、ソルトレイクシティ大会における男子決勝での緊張感が特に印象的でした。出場枠を巡る真剣なせめぎ合いが、代表チームの士気を一層高める結果となりました。入れ替えで新たに加わった選手の活躍もあり、常に代表に選ばれる側にとっても良い刺激になったと思います。

今シーズンは選手にとっても過酷な選考と調整が続いたシーズンでしたが、世界一を目指すチームにとって必要なプロセスであったと考えています。次は世界選手権に向けて、この経験を活かし、さらなる高みを目指してまいります。



2025 年度全国遭難対策委員長会議 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

2025 年 7 月 5 日（土）～ 6 日（日）に東京都の BumB 東京スポーツ文化会館にて全国遭難対策委員長会議及び研修会を開催した。コロナ禍以来、現地会場と Zoom の併用で開催しているが、今後も地方在住関係者の負担・経費軽減のため Zoom 併用を継続することになると思われる。今年も昨年に引き続き JMSCA 財政難のために、現地会場には JMSCA 遭対委員会側は常任委員のみとし、専門員は Zoom 参加とした。参加者は 36 名（会場 21 名、Zoom 15 名：一部参加を含む）であった。実会場参加者が復活しつつある一方で Zoom 参加者が減り、全体としての参加者が減っている。出席可否の返信もない地方連盟・協会も多く、地方の遭難対策委員会の機能低下あるいは JMSCA との連携がうまくいっていないのかもしれない。

事業計画について、昨年はあまり質問の出なかった地方講師派遣事業や地方連盟・協会の減遭難活動への支援に関しての質問があり、これをきっかけにこれらの制度を活用して頂きたい。

共済会の保険の解説の他、ジオグラフィカ開発者の松本圭司氏からと登山用地図アプリの解説と現在地通報や地図情報共有のツールなどの紹介をして頂いた。

共済会の保険に関しては、今年度から保険料が上昇したことの解説などがあった。共済会で取り扱う救助隊員向けの保険や地方連盟・協会の主催行事への包括保険の認知度が低く、これらへの質問が多くなった。

2 日目は、JMSCA 遭対としてこれまで地方連盟・協会向けに減遭難活動の支援を行ってきているが、そのうち大阪府及び兵庫県から取り組み内容とその成果の報告があった。特に兵庫県では道迷い件数に関して明らかな効果が認められる旨の報告があり、本件についてはまた改めて報告の機会を作る予定である。この他、福井県での取り組みの紹介も行われた。

前述の講演を踏まえてディスカッションの時間を設けた。講演の 3 府県の取り組みを中心に質疑や他地方の取り組みや工夫も紹介され活発な討論となった。特に、登山届提出促進として、地方連盟・協会がコンパスや YAMAP と連携して Web 上から容易に登山届を提出できる QR コードを掲載したポスターやチラシを活用している事例の紹介があり、参加者の興味が集中した。

ディスカッション時間や懇親会を含めて、現地での情報交換は他都道府県の取り組みを知ることができ、貴重な情報交換の場となっていると感じている。また、我々 JMSCA 遭対としても地方連盟・協会の要望や困りごと



をお聞きする場であり、頂いたご意見・ご要望は今後の事業に反映していきたいと考えている。

また、次年度の会議でもぜひ参加をご検討頂きたい。

2025 年度全国遭難対策協議会 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

2025 年 7 月 11 日（金）文部科学省の講堂で開催された。全国山岳遭難対策協議会は、スポーツ庁、JMSCA、警察庁、消防庁、環境省、気象庁、国立登山研修所が主催して、山岳遭難の原因について研究協議し、今後の遭難対策の具体的施策に役立てるために毎年開催されている。

今年度は、警察庁からは山岳遭難実態の統計について昨年度は遭難件数が減少に転じた旨を、消防庁からは青森県弘前地区消防事務組合から担当山域での活動と AI を用いたトレーニングについて報告があった。

JMSCA 担当枠としては、JMSCA も参加している山岳安全対策ネットワーク協議会についてコンパス運営会社の今史靖氏が講演した。

登山届のコンパスは日本山岳ガイド協会が今氏が社長を務めるインフカム社と取り組んだものであるが、2022 年から JMSCA、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会が参加し、山岳四団体の共同運営となっている。講演ではこれらの歴史、コンパスの登山届機能（特に警察や消防等との連携）について解説があった。さらに熱心な登山愛好者ではない観光的・レジャー的ハイカー向けの地域別・山岳別簡易登山届システムや外国人向けの TOZAN-TODOKE についての取り組みの紹介がされた。ただ、秋田県、茨城県、大阪府、奈良県、熊本県などコンパスと自治体や警察と連携していない府県もあり、登山届を出す登山者の利便性、遭難時の警察や消防の計画書確認が困難になっている状況もまだ残っている。2022 年以降、JMSCA の遭対委員会としてもこれらの解消に取り組んでおり、これまでに岩手県、山形県、広島県での提携に繋げている。今後も提携拡大に関連団体と共に取り組んでいくが、該当府県の連盟・協会にも働きかけをお願いしたい。

午後は、静岡大学教授の村越真氏から国立登山研修

所専門調査部会の「コロナ禍以降の山岳遭難データから見る年代別特徴とその対策」についての講演、安藤真由子氏（ミウラドルフィンズ、体育学博士、登山ガイド）による「転滑落・転送防止に役立つトレーニング」に関する講演が行われ、その後にパネルディスカッションが行われた。道迷いや転・滑落などの遭難原因について、年代や地域の特性があることなどの報告がされた。特に、50歳を境とする瞬発力の低下が、登山における転滑落遭難の多くなる年代と一致していることを示し、瞬発



力を高めるトレーニングを推奨していたことが印象的であった。

最後に、新会長に就任した町田幸男会長の挨拶で閉会となった。

茨城県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動

茨城県山岳連盟は22団体が構成されております。自然保護を担当する委員会の主な活動を紹介します。

1. 教育活動として自然に関する勉強会の開催

令和4年から令和6年には、

- 日本各山の植物の固有種と、世界で茨城県筑波山のみにある固有種の紹介
- 徳之島に特定外来種（シロハラカエル）が令和5年に発見されてから1年で6500匹捕獲され急速な繁殖がおこっている現状のお知らせ
- カエルが蛇ににらまれると体がすくむといわれているが、寸前まで逃げるタイミングを計っているらしいとの研究の紹介
- カエルの鳴くしくみの解説
などをテーマに学びました。

令和7年は「ヤマビル」について勉強会を実施し、

- ①ヒルの中で吸血するのはヤマビルのみであること
- ②吸血するときは80個ほどのカミソリのような歯で切り裂いて吸血する。その際、歯と歯の間からヒルジンという血液を凝固させず痛みを感じさせない物質を分泌する
- ③靴から靴下を経て足に入る。木などから降ってはこない
- ④人間が出す二酸化炭素を感じとるほか、空気の流れや地面の振動からも感じとる（100メートルくらい前から感知しているらしい）
- ⑤血を吸われないようにする方法は、ズボンの裾と靴下に隙間をつくらないこと。吸われた場合は手などで素早く吸血箇所を絞り出す

⑥吸血能力（吸血量）は1回に0.03ml～1.77ml（平均で0.48ml）、一生で最大8回吸血（0.48ml×8回＝3.84ml）

⑦寿命は平均3年、最長で5年くらい

⑧茨城県にはヤマビルが生息確認されてない

以上のことなどを、『子どもヤマビル研究会』ほかの資料を参考に学びました。

2. 全国一斉に行われる身近な水環境一斉調査

茨城県北部に位置する那珂川千代橋、久慈川湯の里大橋の二か所で実施しております。県北部の調査を実施しているのは茨城県山岳連盟のみです。

3. 自然保護啓発活動

環境省自然公園指導員15名、JMCA自然保護指導員25名、茨城県山岳連盟自然保護委員会19名にて、継続的積極的に活動をしています。

4. 山の清掃活動

花の百名山の高鈴山及び神峰山、日本百名山である筑波山にてコロナ禍以前まで実施しておりました。近年登山者のマナーが向上し、登山道にゴミがほぼ無くなりこの活動を休止しております。

5. 委員会、総会を年に各1回開催

当山岳連盟も、指導員の高齢化、後継者の問題などを抱えておりますが、次世代以降にも引き継いでいただくためにもSustainableな活動を行っていきたくております。

（茨城県山岳連盟自然保護委員会委員長 薄井晴男）



2019年高鈴山、神峰山清掃山行



2019年筑波山清掃山行

JMSCA 自然保護委員会 フィールド研修会 2025

2025年6月14～15日、一昨年・昨年に引き続き富士箱根伊豆国立公園の特別地域三ツ峠山にて、三ツ峠山荘オーナー中村光吉氏にご協力を頂いて、フィールド研修会を開催した。今回も山梨岳連、日本山岳会山梨支部との共同開催としたが、さらに埼玉、千葉、神奈川、東京の日本山岳会各支部の面々が参加、各地での山岳環境保護・保全活動についての情報交換をすることができた。

午前中より、三ツ峠登山口から山荘までの登山道で植物観察を行いながら先行していた山梨岳連、日本山岳会山梨支部メンバーと後発隊が山荘で合流、まずは自己紹介を兼ねて各自の山岳環境保護の活動状況や「思い」を語り合った。それぞれの団体が積極的に活動している様子を伺い知ることができたが、特にシカによる食害は目に余るものがあり、どここの団体も頭を悩ませている。また昨今、毎日のように報道されているクマの目撃情報や人的被害について、温暖化の影響でブナ等の森の木の実の不作が伝えられる中、高齢化が進む里山の管理を如何にすべきか抜本的な解決策が見いだせないままに新しい大きな課題として残った。

13時より中村オーナーにご案内頂き、希少植物の観察会。登山道脇に設置された防鹿柵の鍵を開け、アツモリソウの保護地に分け入る。山頂周辺の登山道の殆どは、しっかり施錠された防鹿柵が取り巻いている。かつては三ツ峠の峰々を彩っていた多種多様な高山植物や緑の絨毯を形作していた下草の多くは姿を消している。深刻なシカ害や残念ながら未だに盗掘も確認されており、また近年では花の撮影を目的とする人の踏み荒らしや踏み固めによる自生地の縮小も危惧され、「柵」は現状唯一の対抗措置と考えられる。

お目当てのアツモリソウはシカ柵の中の更に頑丈な鉄柵の中でしっかり護られていた。しかしながら、どの株も一昨年・昨年より小ぶりで開花した花も少なく、受粉を介在するマルハナバチが袋状の唇弁に潜り込めるか心配とのことであったが、蕾は沢山ついていて以後が楽しみな状態ではあった。昨年以来続く猛暑、また今年は雪が長く残ったことに起因するようだ。毎年同じ日程



ササ類の除草作業



満開の
ムラサキツリガネツツジ

で観察すると、そうした気づきがある。シカ対策をはじめ、アツモリソウ等稀少植物の保護活動の苦労話を伺いながら、やはり自然の営みの影響には抗えないことを強く実感した。

シカ柵を出て、次のメニューは貴重な植物の生育環境を維持するための除草作業。毎年テンニンソウの除草をしてきたが、今年はササ類。何処にでも蔓延るこれも大敵、駆逐への終わりが見えない作業ではあるが、霧雨の中、参加者全員で汗を流し予定の区画の除草を終えた。

さらにムヨウランなど登山道脇に僅かに残る稀少植物を観察しながら、三ツ峠の3つの頂を巡る。途中、令和4年度の山梨県のレッドリストデータブックには＊絶滅危惧ⅠA類(CR)にリストアップされている、ムラサキツリガネツツジが紫色の濃い釣鐘状の花を付けて迎えてくれ、参加者一同歓声を挙げる場面も。またカモメランは、群生地に補強された柵が奏効したか、昨年より沢山の花を咲かせ私たちの目を楽しませてくれ、充実した観察会を終えることができた。

中村氏、三ツ峠山荘スタッフに改めて感謝申し上げます。

＊絶滅危惧ⅠA類(CR)レッドリストにおける分類のひとつで、ごく近い将来に絶滅する可能性が極めて高い種に位置づけられる。

(自然保護委員長 小高令子)

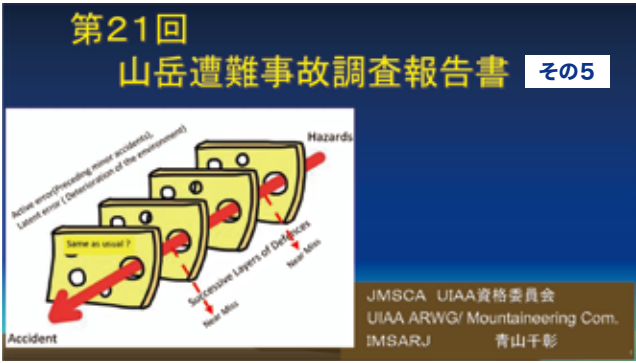
寄贈図書

兵庫山岳連盟	「兵庫山岳」第697号
Corean Alpine Club	「山」2025年6月号 Vol. 291号
朝日本運動新聞社	「スポーツ産業新報」第2474号、第2475号、第2476号
日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.107
健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.567
株ネイチュアエンタープライズ	「山人」8月号 No.938
市立大町山岳博物館	「山と博物館」2025夏号 第70巻2号
(株)山と溪谷社	「ROCK & SNOW」No.108

会報
会報
新聞
会報
会報
寄贈本
情報誌
情報誌

(公社)東京都山岳連盟	「TMF都岳連通信」2025年2号
株山と溪谷社	「山と溪谷」8月号
(公財)日本スポーツ協会	「SPORT JAPAN」vol.80
常北山水会山岳部	「山水」第51号
新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第370号
東京野歩路会	「山嶺」Vol.102 No.1145
(公社)日本山岳会	「山」2025年(令和7年)7月号 No.962
おいらく山岳会	「山行手帖」No.788.25.8

会報
寄贈本
情報誌
会報
会報
会報
会報
会報



7 章 4951人のデータ分析から見た山岳遭難事故の構造 2024年6月現在

1. 基礎データの概略

2024年6月現在、登録データ総数は282人増えて、4951人となった。うち男性2300人、女性2623人（不明28）である（表21）。6章で紹介したとおり、女性事故者数の増加が著しく、男性数を上回っている。今後、さらに差を広げていくことが予想される。

UIAAの傷害および疾患分類 IIC を使用した結果、特に深刻なケースで死亡150人、重体558人が登録された（表22）。

事故発生地点として、日本中央部の発生状況を図16, 17 に示した。関係者と共に、クラスター山域から当データベースの特徴を生かした分析を検討していきたい。また UIAA のARWG が現在計画している国際山岳遭難事故比較にも使用を検討している。

登録データ数（世代別、性別、IIC）

表21 男女別世代人数

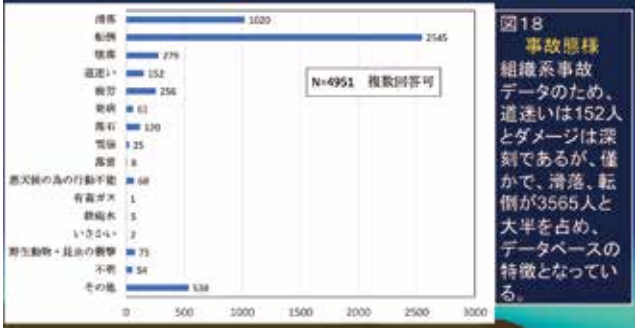
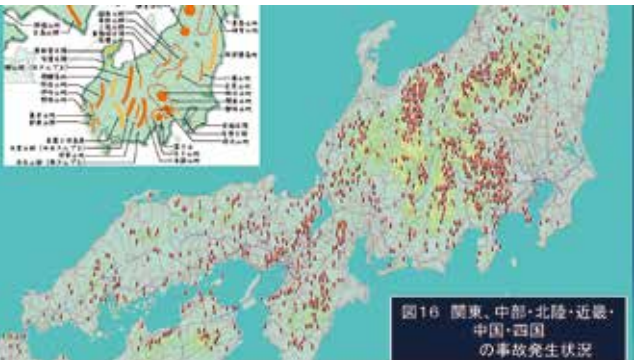
	女	男	計
0-9	1	1	2
10-19	1	7	8
20-29	23	41	64
30-39	108	147	255
40-49	223	265	488
50-59	648	472	1120
60-69	1114	826	1940
70-79	490	487	977
80-89	16	54	70
不明	28		28
総計	2623	2300	4951

データは事故時の年齢

表22 IICと世代人数の関係

年齢層	IIC (Injury and Illness Classification) by UIAA system							計
	無傷	軽傷	中傷	重傷	重体	死亡	不明	
0-9	1							1
10-19	1	4	1					6
20-29	6	13	34	13	2	4	64	126
30-39	42	64	115	36	3	7	265	488
40-49	4	62	119	113	63	9	488	1120
50-59	5	155	232	547	113	23	21	1940
60-69	4	348	421	895	233	34	18	3179
70-79	1	190	333	425	164	11	8	1126
80-89	1	16	31	58	4	2	1	103
不明	28	54	161	168	216	55	77	707
計	94	841	1568	2716	583	77	75	4951

データは日本国内の発生



2. 山岳遭難事故に至る直前までの関連要因の抽出と分析

2.1 事故発生要因の抽出法

山岳遭難事故は複合要因が連鎖的に働くことによって発生すると考えているが、疲労困憊し、荒れた天候、危険な岩場などの事故発生条件を満たしても、事故が発生するとは限らない。大多数の人々は危険な環境下では慎重に行動するためである。この条件設定の難しさが、山岳遭難事故のメカニズムを考える大きなネックとなり、対策を困難にしている。

その背景には、図19に表した「変化する登山リスク要因」があるため事故に関係した複合要因をすべて取り出すことは難しい。特に、ヒューマンエラーに関わる人的要因は具体的に抽出し、数量化することが現段階で不可能に近いためである。



ここで、人的要因について、6章で紹介した事例を基に考えてみる。最も単純な事故ケースとして「晴れた日に、山道を歩きながらおしゃべりに夢中になっていると、枯葉でスリッパし、転倒した」ケースである。

事故者の持つ年齢的な瞬間判断能力／バランス力／筋力の衰え、年齢的なヒューマンエラーによるミスなど人的要素が関係している。この人的要因と、危険には見えない枯葉の斜面と安定した天候による環境要因が組み合わせ

ここで注目すべきは、「何故おしゃべりをストップできなかったのか？」である。危険な場所では、おしゃべりを継続できないため、「自身の持つ危機対応力への過信と、目の前の斜面程度ならオシャベリしても大丈夫」という一種の正常性バイアスが作用していたと考えている。悪天候、不安定な登山道という状況下で、ある人は危険と考え、予定を中止する。ある人は、大丈夫と考え、山行を継続する。人それぞれに、想定されるリスクに対して、どこまで受け入れるのか、「受容リスク＊」の範囲が異なるようである。

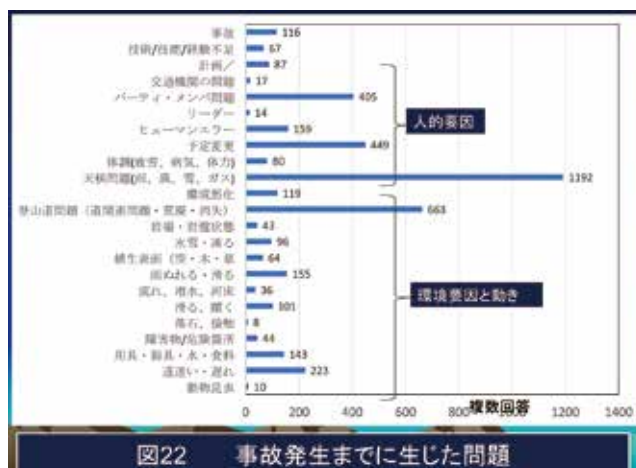
しかし、事故後に適用するモデルのため、1モデルでは、壁にぶつかると、ヒヤリハットとして完結する。途中、内容修正の表現はできない。そこで、どの要因が防護壁になるのか当モデルを念頭におきながら事故のプロセスを流れ図で表し、防護壁になり得る要素と受容リスクを検討した。

[illegible]

* 受容リスク：すべてのリスクに対応できない以上、リスクが小さい、つまり、被害の小さな、発生頻度の少ないリスクに対しては、受入れざるを得ない。これを、**受容リスク**と呼ぶ

2.2 事故発生までに生じた問題項目の特徴

事故発生までに生じた問題を整理すると図22に示すように、「人的要因」と「環境要因と動き」に仕分けし、23項目を抽出した。



次に「事故」項目に注目する。事故前に発生した先行項目であるため、事故の程度にかかわらず、受容して、山行を継続したものである。例えば、表中の転倒、落石の事例は軽度のものであったと思われるが、どの程度の傷害まで山行継続を受け入れるのか、判断が難しい。

[illegible]

分けした。前者は「道が不明瞭」「凍結道であった」などの回答があり、登山道の凍結、荒廃、積雪・植生、道標などの問題がある。後者は「事故、予定変更、道迷い、混雑、仲間」などの問題がある。特徴として、「天候」同様「登山道」項目も、他の項目との結びつきが強い。

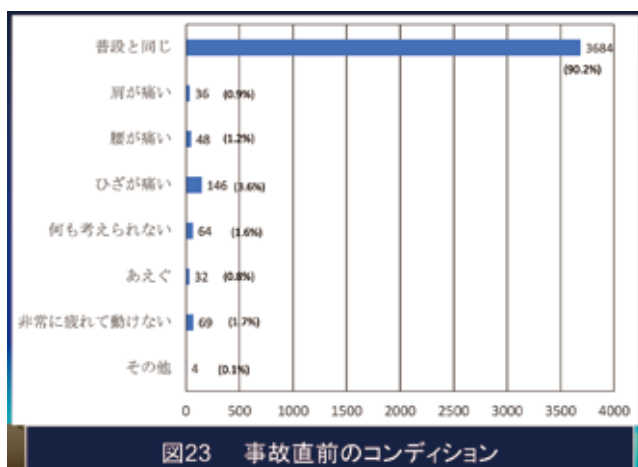
以上、全23項目は単独のものは非常に少なく、相互に関連性を持っている。本事故発生まで、山行を継続しているの、傷害の程度は低いと思われるが、小規模の先行事故としてかなりの割合で発生している。しかし、先行事故が、その後の事故にどのような影響を与えているのか、「疲労」など物理的な影響は理解できるが、メンタルな影響が掴めない。今後の重要課題と考えている。

2.3 事故直前のコンディション

図22で述べたように、事故発生前までに、多くの人々は問題となる出来事を経験している。しかし、「事故直前のコンディション」を調査すると、図23より明らかなように3684人（90%）の人々は「普段と同じ」と回答している。この質問に対し、多くの人々がメンタルより体調に傾いた解釈で回答したとしても、驚く結果である。

なお、事故発生前の山行で影響を受けたのは「膝・腰・肩の痛み」が230人（5.6%）、最も事故が発生しやすいと思われる「疲れて動けない・あえぐ・何も考えられない」は135人（4.0%）であった。

「普段と同じ」なら、事故への警戒姿勢はとらない。何かに気になれば警戒した動きになる。この状態が、事故直前にチーズ防護壁を抜けさせてしまう最後の穴（原因）なのかもしれない。



2.4 転倒・滑落時の動作と環境

「転倒・滑落事故の原因となった動作と環境」という質問は、事故発生過程として、最初の段階、「起因過程」の調査である。最初の不安定な動き出しに対して、受け身動作が対応する。しかし、制動に失敗、身体が大きくバランスを崩す。最終過程として、斜面を移動する転倒・滑落の動作過程に移行する。

起因過程には、細かい過程がある。ハザード地点（滑りやすい場所、躓く場所、あるいは、その地点に向かう衝突物など外力の存在）があり、様々なリスク対応能力を持った登山者が、その地点に向かって移動し、バランスを崩す。その後、受け身過程につながる。この間非常

に短時間であろう。2.3で既述した「普段と同じ」と言う回答は、受け身に失敗し、起因過程に入る直前の最終壁穴と考える。

起因過程の問い「転倒滑落時の動作と環境」の結果は、図24のように、「滑る」が35%を占め、「バランスを崩す」が25.9%を含める。両者で61%を占める。「滑る」原因となるハザードは濡れた枯葉、岩、石、泥、冰雪などである。「バランス崩し」の起因は「滑る」から、クライミング系のホールドの失敗まで幅広く含まれる。13%の「引っかかり」原因のハザードは木の根、岩角の他にアイゼンが目立つ。アイゼンは岩角、雪面の他に自らの片足が多い。

最後に、図中の「その他事項」627件を分類し、表25とした。スキー、クライミング系が多く、特に用具に関する事故が多い。アイゼン、スキーとストック、ロープ、ハーケン、にまつわる事故とビレイの失敗などである。量が多いため、他の機会に紹介していきたい。



終わりに

第21回山岳遭難事故報告は、UIAAで始まった世界の山岳遭難事故データを調査・収集し、国際比較を行う「Accident Reporting WGの紹介」と、IMSARJ主催による「登山道シンポジウム」の紹介から開始した。我が国の登山も、インバウンドにより外国人登山者が急増し、年間145人も事故が発生するようになった。風土の異なる国からの登山者は登山習慣も異なるため、事故の形態も変わってくる。国際的な視点で遭難事故を考える時代になったと考えている。

一方国内にあっては、登山団塊世代（昭和15-30生まれ）の昭和24年生まれまでが後期高齢者になり、（超）高齢者登山時代に入った。

山岳遭難事故の発生状況はその影響を受けて、世代替わりの過渡期に入ろうとしている。女性遭難事故者の急増も、一連の現象と捉えている。

5年後、2029年に第26回山岳遭難事故報告書が作成されることがあるのなら、山岳遭難事故の世代別発生割合が欧米に多い若い世代と高齢者の2こぶ型となるのか、外国人遭難事故がさらに増えるのか、現在とは全く異なってしまった事故形態を報告していることであろう。（完）



Enjoy Climbing!

Enjoy Alpine Climbing! 連載⑤

— アルパインクライマーとしての成長 —

鈴木 雄大

次はOtsuboにリードを代わり、稜上に登ると久しぶりの快調に飛ばせるパート。2ピッチ分ほど平行距離を稼いで、やがて垂直のマッシュルームに行き止まる。慧介がこの処理に取り掛かるが、すぐに効かないアックスに諦め、大きく迂回するルート取りに変更。トライアンドエラーでルートを修正していくしかない。ここは運良く上手くつながっていて、暫く駒を進めたと思ったら、再び巨大なキノコの前でストップ。今度は僕がその20mほどのキノコの中でもマンそうな部分を狙って直上を試みる。アックスは刺さってくれるものの、スクリュウの手応えはない。氷に近い雪といったところだ。下から見ていた時の予想を裏切り、壁に入ると体感では90°に感じられる。あまりの恐怖にフリーでのクライミングは諦め、一度マシなスクリュウ2本で流動分散の中間支点をつくる。ここからは慎重に登ろうと、1本、そして2本目のスクリュウに体重を預け、柔らかに変化したトップ付近の冰雪を除雪していたとき、突然体が大きく投げ出された！ 途端に思考が停止すると同時に、スクリュウが2本連続で抜けていくのが見え、15mほど下の空間で体が停止した。落下がとても長く感じられたので、どこかしら怪我をしているだろうと思っていたが、注意深く体を動かしてみても、まだ大丈夫だった。こんな所で捻挫でもしたらタダでは済まないの、本当に幸運だった。最後の肝となる支点を流動分散していた事と、落ちた先が平らな地面でなく、空洞のような地形となっていて、脚を打ち付けなかった事が幸いした。現場にはシリアスな空気が流れたが、坪ちゃんが垂れ下がっているロープを結び直し、最高地点から先の5mを再び登りにいくことに。どんなに厳しそうでもここが唯一の突破口だった。

僕はフォローの面倒さなどを考えて直上のロープを伸ばそうとしていたが、Otsuboは右の稜線へ最短距離でトラバースするように、スノーバーを使ったシビアなエイドで、時間をかけて進んでいった。稜線の向こうへマントルを返し、姿が消えた時、何とも言えない安堵感が漂っていた。これでラインが繋がったと。怪我がないことを確かめ、改めてフォローで登っていくと、凄まじい高度感に頭がキリッとした。よくこんな雪質の垂直な雪氷を登ろうとしたなど…。でもここしか道はなかったのだ。幸運なことにこのすぐ奥にはルート中で最高の真っ平なテント場が待っていた。

登攀5日目 あとは高低差にして130mのみ。山頂はま



連続するキノコ氷の一つを超える王鞍 photo Yudai Suzuki

だ小さく見えるが、昨日ほどの複雑さはないはずだ。最後の40gのfreeze dried riceを食べ、慧介の長い同時登攀で出発。3ピッチ分は稼いでくれたが、またも垂直なマッシュルームに行手を阻まれる。ここで慧介も不安定な水に不意落ちし、ゼロピン(zeroth screw, or belay anchor)で止まった。色々とギリギリ過ぎる山だ。気を取り直して、今度はうまく突破。そしてリードを僕に代わり、垂直のマッシュルームは懲り懲りなので、勘を研ぎ澄ませてルートファインディングに集中した。すると、マッシュルームの間に奇跡的に繋がっていた上質な60m級の氷のルンゼに吸い込まれ、山頂直下までテンポよく這い上がった。やっとここまで来れた。最後は1メートルのクレバスをシュガースノー頼りに乗越すという忘れられないムーブを起こし、山頂まで一気に駆け上がる。12時前、正真正銘の山頂にスノーバーを2本刺し、2人を迎え入れた。同時登攀分も含んで40ピッチ以上、とても長い登攀だった。今回も仲間に支えられた登頂となった。言葉にならぬ喜びも束の間、反対側の北壁への下降にとりかかる。高所順応で2週間前に降りたラインは氷が緩かったので、北壁の中でも比較的西側の結氷が良さそうな所を狙って下降をした。クライムダウンもおぼつかない疲労感だったので、日射に照らされた水氷に慎重に穴を開け、Vスレッドでの懸垂下降を繰り返した。途中2回ほど、60cmの捨て縄を氷に残したが、それが唯一、僕らがこの登攀で残置したギアとなった。落石も頻発し、最後まで全く気の抜けない脱出劇となり、やっとの思いで氷河に降りた時は生を実感し、充実感に満たされていた。ここからアルパマヨのハイキャンプ地点のコルへの登り返しが、非常にきついものだったが、幸せな一步一步を噛み締めた。ハイキャンプへ着いた時には真っ暗であったが、あとは氷河上の危険地帯も、高所順応で把握していたので、暗闇の中、アルパマヨのノーマルBCまでゆっくりと

氷河とモレーンを歩いて降りていった。アルパマヨBCでは、テントを張る力もなく、空いていたボロい小屋で倒れるように寝込み、翌日、6/30、高所ブーツのまま半日かけて南壁のBCまで、トレッキングルートを下山していった。

初日はミックス壁のクライミングであったが、あとの4日間のリッジクライミング、これはある意味、壁と違って先が見通せない要素が強く、全行程が非常に冒険的であった。しかもそのほとんどが不安定な氷やスノーマッシュルーム。懸垂下降も不可能なので、進めば進むほど、山頂に着くまで引き返せないという恐怖感との闘いだった。一步一步が安全圏から遠ざかると同時に、何としても山頂を越えないと無事に帰れないのではという緊張感が始終続いていた。

BCへと戻り、一筆書きで描いたラインを見上げると、山中で感じていた緊迫感や苦しみといった感情が、全て

美しい思い出となっていた。

3人で決めたルート名の「ドリームハウス」は、僕らが泊まっていたワラスの安宿の名前からとったものだ。また、複雑なリッジ状に奇跡的に存在したビバークスポットが印象的だったので、こう呼ぶことにした。(これは後から僕が思っただけ)

*

この登攀の後、僕の心はすでにパキスタンに向いていた。7/13に一度、ペルーから東京に帰国し、8/19にはイスラマバードへ渡っていた。この1ヶ月強は、ジムや岩場でクライミングのフィットネスを取り戻すことに努め、栄養もたくさん補給してリラックスするよう心がけた。パキスタンへ出国する頃にはジムで5.12-まではオンサイトもできたので、アルパインクライミングをするのは十分な体調だった。



令和7年度 定時総会報告

○日 時：令和7年6月22日(日)
10:00～15:20

○場 所：JSOSビル3階第一会議室と
Webのハイブリッド会議

1. 開 会

会議成立状況(定款第18条)

正会員数69名 定足数過半数 35名以上
開会時、正会員＝56名出席(対面出席29名、オンライン27名)、委任状6名、書面決議2名により出席数合計64名、欠席5名にて会議は成立した。(定款18,19条)

なお、オンライン会議システムが正常に動作し、即時に意見交換ができることを確認した。

2. 出席者

※印は対面、他はオンライン
蛭田伸一会長*、古賀英年*、吉田春彦*の各副会長、小野寺齊専務理事*、町田幸男*、野村善弥*、赤尾浩一*の各常務理事 以上7名

望月啓治*、栗田季慎子*、安井博志、小高令子*、前田善彦*、小田部拓*、佐藤建、島田邦昭*、中島隆之*、中橋沙羅*、畑中渉*の各理事 以上11名

古屋寿隆*、佐久間務*の各監事 以上2名

石井昭彦(北海道)*、服部一雄(青森)、吉田春彦(岩手)(役員)*、館内潤(宮城)、平子吉政(福島)、西内博(茨城)、桑川章(栃木)*、吉田直人(群馬)、加藤富之(埼玉)*、廣川健太郎(東京)*、水島彰治(神奈川)*、小宮山稔(山梨)*、渡辺 茂(新潟)*、杉田浩康(長野)、中西紀夫(富山)、伊藤智彦(愛知)、加藤正之(三重)、小木曾昭文(岐阜)、澤山恵(滋賀)*、小畑和人(大阪)*、古賀英年(兵庫)(役員)*、藤本直民(奈良)、小坂秀己(鳥取)、世良清美(島根)、石原敬士(岡山)、山田雅昭

(広島)*、古林喜明(山口)、明上邦彦(香川)、原秀樹(徳島)、峯本典寛(愛媛)、西岡義之(高知)、寺崎良夫(福岡)、宮原敏明(佐賀)*、古川好幸(長崎)、西本安幸(熊本)、原勇人(大分)*、新原佑治(宮崎)、細川浩(沖縄)、下村真一(高体連) 以上38名

委任:三浦一衛(秋田)、山本利幸(福井)、木ノ内高嘉(静岡)、濱田豪、西谷善子、樋口義朗 以上6名

書面決議:菅野亨一(山形)、山口進(和歌山)2名

3. 同席者

顧問:衛藤征士郎*、田中文男*、
顧問弁護士:萩原崇宏*
委員長:百瀬恭平*、
事務局員:徳屋説得*、赤坂陽子*

4. 議長選出

定款第16条にさだめるところにより、蛭田会長が議長となり、定款第18条第1項に定める定足数の充足を前述1のように確認して、本会議の開会を宣言した。

次いで、定款第20条第1項に基づき、議事録署名人として、栗田季慎子理事、澤山恵正会員(滋賀)について決議し、承認された。

5. 議 案

蛭田会長が、令和6年度の事業が無事終了したことを報告し、皆様方のご協力であると、謝意を表した。

その後、以下の審議にはいった。

議案第1号 令和6年度事業報告について
小野寺専務理事と赤尾事務局長が配布資料を基に説明した。

議案第2号 令和6年収支決算の承認について

赤尾事務局長が、配布資料を基に、貸借対照表、正味財産増減計算書について説明した。その後、望月理事が財政再建計画を、佐久間監事が監査報告を説明した。

質疑応答の後、議案毎に採決を取り、以下のように異議なく承認された。

議案第1号 反対0名、棄権0名、賛成64名(参加者賛成56名、委任6名、書面

決議2名)

議案第2号 反対0名、棄権0名、賛成64名(参加者賛成56名、委任6名、書面決議2名)

議案第3号 基本財産の処分について

赤尾事務局長が、短期運転資金調達の一手段として基本財産を処分することの背景を説明し、その後質疑応答の後、採決を取り、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成64名(賛成56名、委任6名、書面決議2名)

議案第4号 令和7、8年役員選任について

議長が、候補24の濱田豪氏が、役員推薦辞退届を出しているため、議決対象外とすること、それ以外の候補者について、役員候補者一覧表を基に、候補者の選任について賛否を1名ずつ取ることを伝えた。採決の結果、以下のように全員承認された。

氏名	反対	棄権	賛成	結果	備考
理事					
石井 昭彦	0	0	64	承認	
吉田 春彦	0	0	64	承認	
廣川健太郎	0	0	64	承認	
中橋 沙羅	0	0	64	承認	
星 一男	0	0	64	承認	
石田 英行	0	0	64	承認	
武田 豊明 (総会欠席)	1	3	60	承認	(反対)望月理事、(棄権)畑中理事、廣川・小宮山正会員
原 勇人	0	0	64	承認	
下村 真一	0	0	64	承認	
蛭田 伸一	0	0	64	承認	
野村 善弥	0	0	64	承認	
望月 啓治	0	0	64	承認	
畑中 渉	0	0	64	承認	
古賀 英年	0	0	64	承認	
前田 善彦	0	0	64	承認	
安井 博志	0	0	64	承認	
赤尾 浩一	0	0	64	承認	
町田 幸男	0	0	64	承認	
小高 令子	0	0	64	承認	
栗田季慎子	0	0	64	承認	
小田部 拓	0	0	64	承認	
中島 隆之	0	0	64	承認	
平田 伸也 (総会欠席)	0	6	58	承認	(棄権)畑中・栗田・町田・望月理事、廣川・小宮山正会員
奥井 健吾	0	0	64	承認	
藤江 理枝	0	0	64	承認	
西原斗司男	0	0	64	承認	

監事					
古屋 壽隆	0	0	64	承認	現監事
佐久間 務	0	0	64	承認	現監事

8. 報告

報告第1号 令和7年度事業計画と収支予算について

小野寺専務理事と赤尾事務局長が、配布資料を基に説明した。

収支予算については、4月から5月に補助金額が確定したので、今後補正予算で、変更していく旨説明した。

報告第2号 令和6年度山岳共済会事業報告と収支決算報告について

小野寺専務理事が配布資料を基に、佐久間監事が監査報告を説明した。

報告第3号 令和7年度日山協山岳共済会事業計画と収支予算について

小野寺専務理事が配布資料を基に説明した。

報告第4号 第61回全日本登山大会兵庫大会について

古賀副会長が、配布資料を基に説明した。

報告第5号 小野寺専務理事の退職手当支給に関する取り扱いについて

赤尾事務局長が、配布資料を基に説明した。

報告第6号 パラクライミング協会との協力体制について

町田SC部長が、口頭で説明した。

報告第7号 山岳共済会改革について

古賀副会長が説明した。

報告第8号 諸般の報告について

野村登山部長が、日本オリエンテーリング協会の外部理事となった。

小野寺専務理事が、アイスクライミングを所轄しているUIAAから、冬季オリンピックの競技対象となるような推薦文を出してほしい旨の要請が来ていることを報告した。

オンライン会議システムは、終始異常なく、議事全部を終了した。

以上

令和6年6月22日 記録 赤尾 浩一

【総会資料について】

令和6年度財務報告、令和7年度予算は以下のHPからご参照ください。

<https://www.jma-sangaku.or.jp/about/data/>



令和7年度 第4回 理事会報告

○日時：令和7年6月22日（日）

15：35－16：30

○場所：JSOSビル3F会議室4及びZoom

○出席者：（役員候補者一覧表順）

石井・吉田・廣川・中橋・星・石田・原・下村・蛭田・野村・望月・畑中・古賀・前田・安井・赤尾・町田・小高・栗田・小田部・中島・奥井・藤江・西原理事
以上24名

佐久間・古屋監事 以上2名

○欠席：武田・平田理事 以上2名

1. 開 会

2. 会議成立状況報告

理事数：開始時26名中24名出席（定款第33条、定足数＝14名（1／2超）

監事数：2名出席

なお、オンライン会議システムが正常に動作し、即時に意見交換ができることを確認した。

3. 議長選出

会長未定のため、赤尾事務局長が代理で議長を務める。

4. 議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）

5. 議 題（注：審議順に記載）

議案第1号 会長の選任について

6月12日に行った事前打ち合わせで、町田理事が候補者となっている。自他薦含め、他の候補者がいないか確認した結果他の候補者はいなかった。

町田理事を会長とすることについて賛否をとった結果、以下のように、全員賛成で承認された。

反対0名、棄権0名、賛成24名

この後、町田会長が、議長を務める（定款第32号）。

会長挨拶 ご存じの通り様々な問題があるが、理事26名、監事2名の体制で、できないところは協力しあって、組織として対応していきたい。決めた日時は守る、できないときは何が問題かを明瞭にしたうえで、スピード感を持って対応していただきたい。皆様からのご協力をぜひお願いしたい。

議案第2号 業務執行理事の選定について

町田会長が、自身を除く以下の5名の業務執行理事を提案した。

副会長（登山部長）：廣川健太郎

副会長（SC部長）：畑中渉

専務理事（総務部長）：望月啓治

常務理事（事務局長）：赤尾浩一

常務理事（マーケティング担当）：小田部拓
質疑応答のちに、上記提案に対して、採決を取り、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成24名

議案第3号 今後の常務理事会、理事会の進め方について

以下の開催日時を基本とすることになった。

常務理事会：第2火曜日PM7:00から

次回 6月24日、7月8日を予定

理事会：第2木曜日PM1:00から

次回 7月10日を予定

6. その他

- ・役員就任に伴い、登記のために必要書類を提出いただきたい（後日メールで伝達予定）。
- ・アジア大会開催のために情報共有の場を設けてほしい。
- ・理事としての意思決定責任と、委員長（業務執行）としての責任があることを認識して意見を出してほしい。

田中名誉会長挨拶

・理事として負担になる部分はあると思うが、登山者のために何ができるか、常に意識しながら対応してほしい。JMS

CAが登山者から、より頼られる組織になってほしい。

蛭田前会長挨拶

・短い間でしたが、ご協力いただき有難うございました。あと2年間任期がありますので、会長をささえていきたい。

オンライン会議システムは、終始異常なく、議事全部を終了した。

以上

令和7年6月22日

記録 赤尾浩一



令和7年度 第5回 理事会報告

○日時：令和7年7月10日（木）

13時～16時00分

○場所：JSOSビル3F会議室4及びZoom

○出席者：町田 幸男、石井 昭彦、原 勇人、安井 博志（14:30より参加）、藤江 理枝、廣川 健太郎、吉田 春彦、下村 真一、小高 令子、西原 斗司男（欠）、畑中 渉、中橋 沙羅、蛭田 伸一、栗田季慎子、望月 啓治、星 一男、野村 善弥、中島 隆之、赤尾 浩一、石田 英行、古賀 英年、平田 伸也（欠）、小田部 拓、武田 豊明、前田 善彦、奥井 健吾、古屋 寿隆【監事】、佐久間 務【監事】

参加：理事24名、監事2名

欠席：理事2名

1. 開 会

会議に先立ち、望月専務理事が、先の6月22日の定時総会において武田氏、平田氏の2名の理事候補者が欠席でその理由が不明との当局からの説明があり、その結果、議決時に正会員数名から否認や棄権の表決がなされた。しかし、後日確認したところ、本務や公務のためという正当な理由による欠席と判明したことから、両氏から改めて理由を述べていただいた。武田氏は愛媛県からの委嘱による試験監督の業務、平田氏はJMSCAスポンサーに関する業務のための欠席であった。なお、平田氏は今会議も本務による欠席につき、望月専務理事からその旨の報告をした。

2. 会長挨拶

定時総会での不手際については申し訳ない。お詫び申し上げる。

新体制となり最初の理事会につき所信を申し上げる。この体制の方針として、1. JMSCの組織力強化、2. 財政再建、3. 外部から頼られる組織になる、の3つをあげた。

理事の皆様には、業務執行理事の監督のほか、各委員会をガバナンスの最小単位としてとらえ委員会が確実に機能するようしっかり管理監督をすることをお願いしたい。また、理事会資料を事前に目を通していただき、スピード感を持って対応し、悪い情報は早く出すようにしてほしい。

3. 会議成立状況報告

理事数26名中23名出席、監事数2名中

2名出席（定款第33条、定足数＝14名（過半数以上））

4. 議長選出

会長が議長をつとめる（定款第32条）

5. 議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）

6. 議 題

議案第1号 前回（6月22日開催）理事会議事録の承認について

以下のように異議なく承認された

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第2号 組織管理運営規程改定の考え方について

望月専務理事が配布資料を基に、考え方と方針を説明した。

組織体制については8月理事会時に具体的な案を示し、それを基に各委員会で審議し、9月20日までに報告を受け10月理事会において組織管理運営規程の体裁を含め改定を完了する予定であり、こうした流れを前提に次の議案の担務案を示すことを説明した。

また、委員会を最小のガバナンス単位ととらえ、委員長が委員会を掌握し、議案上程や支払い依頼等を代表して行うこと、主管理事は、担当委員会の人事権や財務権を所轄すること、主管理事と委員長が同一者ではないなどとの区分を明確にした。

議案第3号 各理事の担務について

望月専務理事が配布資料を基に説明し、その後決議をとり以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第4号 第3期基金募集事項案について

望月専務理事が、基金へ協力しても良いとの声があること、来年の年度末に対応しなければならないことから、昨年と同様に8月から9月にかけて、目標値の5000万円に足りない分（1280万円）の基金を募集する案について説明し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第5号 U I A A署名依頼への対応について

廣川副会長が、アイスクライミング競技の現状を画面に表示し、説明し、2030年冬季オリンピックの追加競技として推薦することに、N Fとして反対する理由がなく、支持するという提案について採決し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第6号 「JMSCAクライミング体験キャンプ in 鉾田」の開催について

栗田理事が配布資料をもとに説明し、町田会長と、畑中S C部長が、表敬訪問することの補足説明がされた。

本件は、S C普及委員会が所管しJMSCAが主催になり、主管が茨城県となることの審査を経たうえで理事会に提案され、承認という機関決定プロセスを経ることが必要であると指摘がされた。今後S C普及委員長が中心になって、委員会内で予算計画を含め、審査することが確認された。その後採決し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第7号 「DMG MORI Arena CUP」公

認大会申請承認依頼について

栗田理事が、配布資料をもとに説明した。

本件について、申請書類が、直接事務局に送付されてきたが、S C普及委員会として、書類の内容を確認することが必要なので、今後の書類の流れを含め手続きを整理することとした。その後、採決をとり、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成23名

議案第8号 補正予算の編成について

各専門部（S C部、SKIMO委員会、事務局）から、状況報告をした。

当初予算から、どう変わるか、口頭で説明がされ、8月の理事会に提出し、正式決定することを目標にすることを確認した。

議案第9号 国スポS C競技リード種目における競技運営方法の回答について

原理事が回答案について説明し、文書表現の一部を修正することを条件に、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成24名

議案第10号 JMSCAスポーツクライミング競技規則一部改正について

中橋理事が、S C技術委員会から提案されている改正案について説明し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成24名

議案第11号 2025 S C国際競技大会ユース日本代表選手選考基準改正について

畑中副会長が、S C強化委員会から提案されているユース日本代表選手選考基準改正の要旨〈3名から4名へ、2つの選考基準を1つの選考基準にまとめた〉を説明し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成24名

7. 報 告

報告第1号 6月末時点の主な収支及びキャッシュフローの状況

赤尾事務局長が、資料を基に説明する。

主な後質疑応答の概要

- ・年度末に予想される資金確保手段についての問いに対し、業務執行理事を中心に検討し、確実に対応していく旨の回答。
- ・当該内容をそのまま、各岳連に説明のために配布するか否かについては、別途検討する旨を回答。

報告第2号 2025年度JMSCAスポーツクライミング部ブロック研修会の受講料の一部変更について

原理事が、説明した。

報告第3号 S C部委員会名簿2025 国スポ委員会常任委員の変更について

原理事が、常任委員1名がはずれ、主管理事となり、総勢23から22名となり、常務理事会で承認されていることを報告した。

報告第4号 2025年度国スポブロック大会T D派遣について

原理事が、説明した。

報告第5号 第80回国スポ大会（青森）スポーツクライミング競技リハーサル大会開催申請について

原理事が、説明した。

報告第6号 「スポーツクライミングジャパンツアー 2025」について

栗田理事が、9月より開始できるよう準備

している旨説明した。

事業全体の収支が明瞭になっていないので、関係者に共有し、補正予算に反映するようにしてほしいとの要望がでた。

報告第7号 A選手登録のための義務研修について

栗田理事が、9月から開始予定である旨説明した。令和6年度とは違う講師を確定するため調整中である状況を補足説明した。

報告第8号 役員派遣ほか渉外等について（6月～8月）

町田会長が、イベント参加実績及び予定について説明した。

- ・モンベル設立50周年記念に参加
- ・全山遭への参加予定
- ・多久高校（J O C強化拠点）への訪問予定
- ・インターハイへの参加（全日技術顧問として野村理事参加）予定

8. 各委員会議事録について

望月専務理事が、クラウド（B o x）に格納整理予定と説明した。

9. 今後の予定

令和7年度 8月常務理事会

8月12日（火）

令和7年度 8月第6回理事会

8月14日（木）P M 1:00 からを予定

令和7年度 9月常務理事会

9月9日（火）

令和7年度 9月第7回理事会

9月11日（木）

10. その他

- ・岩手山クラウドファンディングへの協力に対し、吉田理事がお礼を述べた。
- ・昨年総会で決まった善管注意義務違反者の中で、解決金の履行がされていない者への対応について、検討したほうが良いのではとの発言があり常務理事会で別途検討することになった。
- ・7/17（木）から 7/24（木）は赤尾事務局長不在予定。
- ・JMSCAフレンドの状況と、今後の見通しをアナウンスしてほしい、システム仕様書、過去の要約（資料）を配布してほしい等の意見が出た。今後、会長名による文書を内容確認しだい発出予定、その他資料も個別対応予定となった。

以 上

令和7年7月10日

記録 赤尾浩一

お詫びと訂正

登山月報第675号の理事会報告で、6. 議題の議案第9号 覚書について、適切でない表現がございましたので以下のように訂正するとともにお詫びします。

（誤）交渉対応者の競技委員長の百瀬氏から特段の説明はなかった。

（正）事前の覚書の内容確認等が担当委員会になかったため、競技委員会が、先方と確認して対応することになった。

「かすみちゃんのハイキング日記」



表紙のことば



「大峰山系（世界遺産 大峯奥駈道）」

近畿の屋根と称される紀伊山地の中央部を、南北に 150Km にわたり大脊梁を形成しているのが大峰山脈です。

この大峰山脈を吉野山から熊野本宮まで踏破する修験道の修業が大峯奥駈で、8 世紀から連綿と歩き続けられている道として、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成遺産「大峯奥駈道」となっています。

写真は東方に位置する大台ヶ原山の竜口尾根から大峯奥駈道を写したもので、右から大普賢岳、行者還岳、弥山、八経ヶ岳、釈迦ヶ岳などを見渡すことができます。

奈良県山岳連盟 顧問 川畑忠仁

編集後記

ジオグラフィカの作成者である松本さんが、「いちおくのクン」(<https://kzi.jp/gps.html>) という便利なページを公開しています。このページをブラウザで開くと、現在地の緯度経度がすぐに表示されるので、山岳遭難などの緊急時に自分の居場所を正確に伝えるのに役立ちます。

最近、中高年の登山者について、男性では疲労やバテ、女性では転倒が多いというデータがあるそうです。毎週低山でも登ることで体力がつき、こうしたトラブルを減らせるそうです。最近事故が増えているとも言われていますので、皆さまも安全に気をつけて、これからの登山シーズンをお楽しみください。（松本光顕）

登山月報 第 677 号

定 価	110 円 (送料別)
予約年間	3,000 円 (送料共) (毎月 1 回 15 日発行)
発行日	令和 7 年 8 月 15 日
発行者	東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号 Japan Sport Olympic Square 905 公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
電 話	03-5843-1631
F A X	03-5843-1635

山岳
雑誌

岳人

がくじん
山と人、時代をつなぐ「岳人」

9月号
販売中

【特集】ジオパークの山
東日本編

モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて販売中!

毎月15日発売 価格1,100円(税込)



▶年間購読が断然おトクです!

年間購読 通常特典 購読割引 送料無料 限定品プレゼント

さらに モンベルクラブ 会員さまには モンベルポイント 5,000P プレゼント!

モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典

岳人オリジナル手ぬぐい



岳人の表紙絵を描く 中村みつを氏のイラストを使用!

岳人
カード

全国2,000ヵ所以上で
ご優待!



全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>
<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト

0120-982-682 / TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組めます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
12, 13, 14, 15	- 再生可能エネルギーの普及支援 - 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング	1, 2, 3, 4, 5, 6	- 健康づくりの支援 - 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応	7, 8, 9, 10, 11	- 次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） - 災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



日山協山岳共済会のご案内

**安全登山は登山者の努め、
山岳保険は義務。**

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2023年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
(2024年6月13日)

発生件数	3,126 件 (前年対比 111件増)
遭難者数	3,568 人 (前年対比 62人増)
死者・行方不明者	335 人 (前年対比 8人増)



2025年版

日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.jp)

